

## 2016 年度第 1 回日本語教育研修会（台北 7 月 23 日、高雄 7 月 24 日）報告

一般社団法人アクラス日本語教育研究所

代表理事 嶋田 和子

セミナーテーマ：

「OPI の考え方を授業に生かす—教師も学習者もくわくわくする授業>をめざして—」

2016 年 7 月 23 日、24 日の両日、台北と高雄で、上記のタイトルで研修をいたしました。両会場合わせて 100 名の参加者の方々とお会いすることができましたが、台湾で活躍する日本語の先生方の熱心な姿が強く印象に残っています。当日さまざまな資料を用意しましたが、私が特に伝えたかったことは、以下の 3 点です。

- ・学習者の発話を引き出すには、教師の質問力が大切である。
- ・OPI(Oral Proficiency Interview)を学ぶことで、Proficiency を重視した教育実践が可能になる。
- ・<くわくわくする授業>は、教師が「引き出し屋」「気づかせ屋」「仕掛け屋」になることで生まれる。

2 時間 10 分という限られた時間であったことから、教育実践や Proficiency 重視の教材にはあまり触れることはできませんでしたが、考え方や振り返り方などについてはお伝えできたのではないかと思います。

### 【OPI 理論を学ぶ】

4 ページにまとめた資料「OPI とは何か？」をもとに、OPI の理論について説明しました。本来 4 日間の OPI ワークショップで実践しながら学ぶ内容に関して研修会では、「特徴・判定基準・総合タスクの階層的配列」に焦点を絞り、20 分程度でざっと紹介し、評価のポイントを理解していただきました。あとは、実際にインタビューを聞きながら、評価にチャレンジしたり、自分自身の実践を振り返ったりする時間に当てました。

### 【P さんに対する OPI インタビュー 2 件を比較する】

まずは、P さんに対する 2 人のテスターによる OPI インタビューを聞きました（インタビュー(1)=4 分、インタビュー(2)=7 分）。この 2 本のサンプルとは、「長いこと OPI から離れていて、インタビュー技術をすっかり忘れてしまった」というテスター A のインタビュー(1)、そして私が同時期に P さんに実施したインタビュー(2)のことを指しています。2 本のインタビューを聞き比べることで、「テスターの質問によっていかに被験者の発話の質・量が違ってくるか」ということに参加者の方々に気づいていただくことが狙いです。実は、

OPI においてテストの質問力が重要であると同様に、授業では教師の質問力が極めて大切であり、それによって授業の質が違ってくるのです。

### 【KさんのOPIインタビューを聞いて判定。さらにフィードバックについて学ぶ】

次に、KさんのOPIインタビューを最初から最後までビデオで見ました。このワークの目的は、ラポール作り、話題をスパイラルに展開する質問力などを理解し、「OPIの考え方を授業に生かす」ことでした。また、実際に行なった「Kさんに対するフィードバック」を紹介し、フィードバックの大切さにも気づいていただきたいと考えました。研修会終了後、「どのタスクが出来て、どこでブレークダウンしているかがよくわかりました。判定が自分でしっかりできたのが嬉しかったです」というコメントを複数の参加者からいただきました。今回の研修会では、参加者の皆さんの「学び取る力」の強さに何度も驚かされました。

### 【OPIを学んで、教師力を身につける】

OPIを学ぶことで、教師に求められているさまざまな力が身につきますが、今回の研修会では、とくに「質問力」に焦点を当てて話をしました。詳しくは『目指せ、日本語教師力アップ—OPIでいきいき授業』(2008,ひつじ書房)をご覧ください。

1. 評価する力—学習者の力を総合的に評価
2. 縦軸思考の重視—全体の中の位置確認
3. 突き上げ力—「i + 1」でギアチェンジ
4. 質問力—学習者の発話を引き出す質問の仕方
5. 傾聴と共感—OPIで学ぶカウンセリング・マインド
6. 自己教育力—内省から生まれる実践力

### 【<わくわくする授業>を実現するには？】

私はよく研修会で「皆さんは、わくわくしながら授業をしていますか」「学習者の方は、わくわくしながら授業に参加していますか」と聞いています。<わくわくする授業>は、学習者自身が自分のことを語り、他者とつながることを大切にし、教師も学習者とともに学び合う関係でこそ生まれるのではないのでしょうか。「対話・つながり・学び合い」をキーワードにした日本語教育を実践していきませんか。

#### ♪♪ 最後にちょっとひと言 ♪♪

学習者が言語運用能力を向上させたいのであれば、教師が取るべき役割は、自分自身を「舞台上上がった賢人」に見立てるような伝統的なものではなく、むしろ、「側に付き添う案内人」というようなものになるはずである。すなわち、教師側からの話を最小限に抑え、学習者が発話に参加する機会を最大限に増やすという役割である。

『ACTFL-OPI 試験官養成マニュアル(1999)』(p.121)